

長野県中野市

安源寺遺跡

中野市西部デイサービスセンター（痴ほう型）建設に伴う

発掘調査報告書

2003-3

中野市

長野県中野市

安源寺遺跡

中野市西部デイサービスセンター（痴ほう型）建設に伴う

発掘調査報告書

2003-3

中野市



B トレンチ地層断面



C トレンチ地層断面

刊行にあたって

安源寺遺跡は、中野市の高丘丘陵上の安源寺集落付近にあり、遺跡の中心が小内八幡神社裏の斜面上に広がる旧石器時代から近世にいたるまでの大きな複合遺跡です。いうまでもなく、埋蔵文化財は郷土の歴史を解明するうえで、大変重要なものであり、こうした埋蔵文化財と開発の調和を図ることが、行政の大きな課題となっています。

今回の調査発掘は、西部デイサービスセンター（痴ほう型）建設工事に伴うもので、文化財保護や福祉の増進という二つの目的を調和させるために、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存することといたしました。

調査の結果、粘土採掘場が発見されました。残念ながら、採掘した時期の特定はできませんでしたが、弥生時代後期以降のものと考えられています。高丘丘陵は古代の大窯業地帯となっていました。こうした古代の窯業との関連性も考えられ、今後の郷土研究に欠くことのできない資料となりました。

中野市には数多くの遺跡があります。私たちはこうした遺跡を護り、後世に伝えていく義務があります。今後とも中野市では、開発と調和を図りながら、遺跡を守っていきたいと考えています。文化財保護の趣旨を御理解いただき、御協力を賜りたいと存じます。

このたびの発掘調査に御協力いただいた地域の皆様や、発掘関係者各位に心から御礼を申し上げ、刊行の言葉といたします。

中野市長 綿貫 隆夫

例 言

1. 本書は、平成14年5月7日～22日までにわたって調査された、中野市安源寺に所在する安源寺遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、中野市高齢者福祉課の委託を受け、(社)中野広域シルバー人材センターが行った。
3. 整理作業及び報告書作成作業は、中野市教育委員会の指示のもと、竹田保夫・芋川純子・金井美知子が行った。
4. 本遺跡の出土遺物は中野市歴史民俗資料館が保管している。
5. 本調査の調査体制は次のとおりである。
調査責任者 中野市教育委員会
調査員 竹田保夫
発掘作業員 坂口二郎 徳永徳一 中林喜一
藤木利高 武藤良助
整理作業員 芋川純子 金井美知子

本文目次

第Ⅰ章 遺跡の概要	1
第1節 位置と立地	1
第2節 安源寺遺跡のこれまでの調査	2
第3節 安源寺遺跡の概要	2
1. 旧石器時代	2
2. 縄文時代	2
3. 弥生時代	2
4. 奈良・平安時代	3
第4節 高丘陵における粘土採掘坑の調査	6
第5節 調査の方法	6
第6節 作業単位の把握	6
第7節 作業日誌	7
第Ⅱ章 遺構と遺物	8
第1節 遺構	8
1. 粘土採掘坑 Aトレンチで検出された遺構	8
2. Bトレンチで検出された遺構	8

3. Cトレンチで検出された遺構	10
4. 土坑	15
5. 柱穴状遺構	15
第2節 遺物	15
1. 土器	15
2. 鉄器	15
3. 石器	15
第Ⅲ章 小結	17
第1節 Aトレンチの所見	17
1. 第1号、2号、3号粘土採掘坑について	17
第2節 採掘底部に見られるバケツ状の落ち込み	17
第3節 粘土採掘坑の特徴	17
第4節 昭和6年調査結果との対比	17
第5節 まとめ	17

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 調査区	3
第3図 窯跡遺跡分布図	4
第4図 周辺の遺跡	5
第5図 粘土採掘作業単位模式図	6
第6図 粘土採掘坑遺構	9
第7図 Bトレンチ・断面図	12
第8図 Cトレンチ・断面図	13
第9図 Aトレンチ・断面図	14
第10図 土坑No.1	15
第11図 遺構図	15
第12図 遺物	16
第13図 粘土採掘坑No.1 模式図	18

写真図版

図版1 Aトレンチ地層断面(1)	21
Aトレンチ地層断面(2)	21
Aトレンチ地層断面(3)	21
図版2 Aトレンチ地層断面(4)	22

図版 2	A トレンチ地層断面(5).....	22	図版 5	C トレンチ地層断面(3).....	25
	A トレンチ地層断面(6).....	22	図版 6	C トレンチ地層断面(4).....	26
図版 3	B トレンチ地層断面(1).....	23		C トレンチ地層断面(5).....	26
	B トレンチ地層断面(2).....	23		C トレンチ地層断面(6).....	26
	B トレンチ地層断面(3).....	23	図版 7	C トレンチ地層断面(7).....	27
図版 4	B トレンチ地層断面(4).....	24		C トレンチ地層断面(8).....	27
	B トレンチ地層断面(5).....	24		C トレンチ地層断面(9).....	27
	B トレンチ地層断面(6).....	24	図版 8	土 坑.....	28
図版 5	C トレンチ地層断面(1).....	25		柱穴状遺構.....	28
	C トレンチ地層断面(2).....	25		作業風景.....	28

第I章 遺跡の概要

第1節 位置と立地

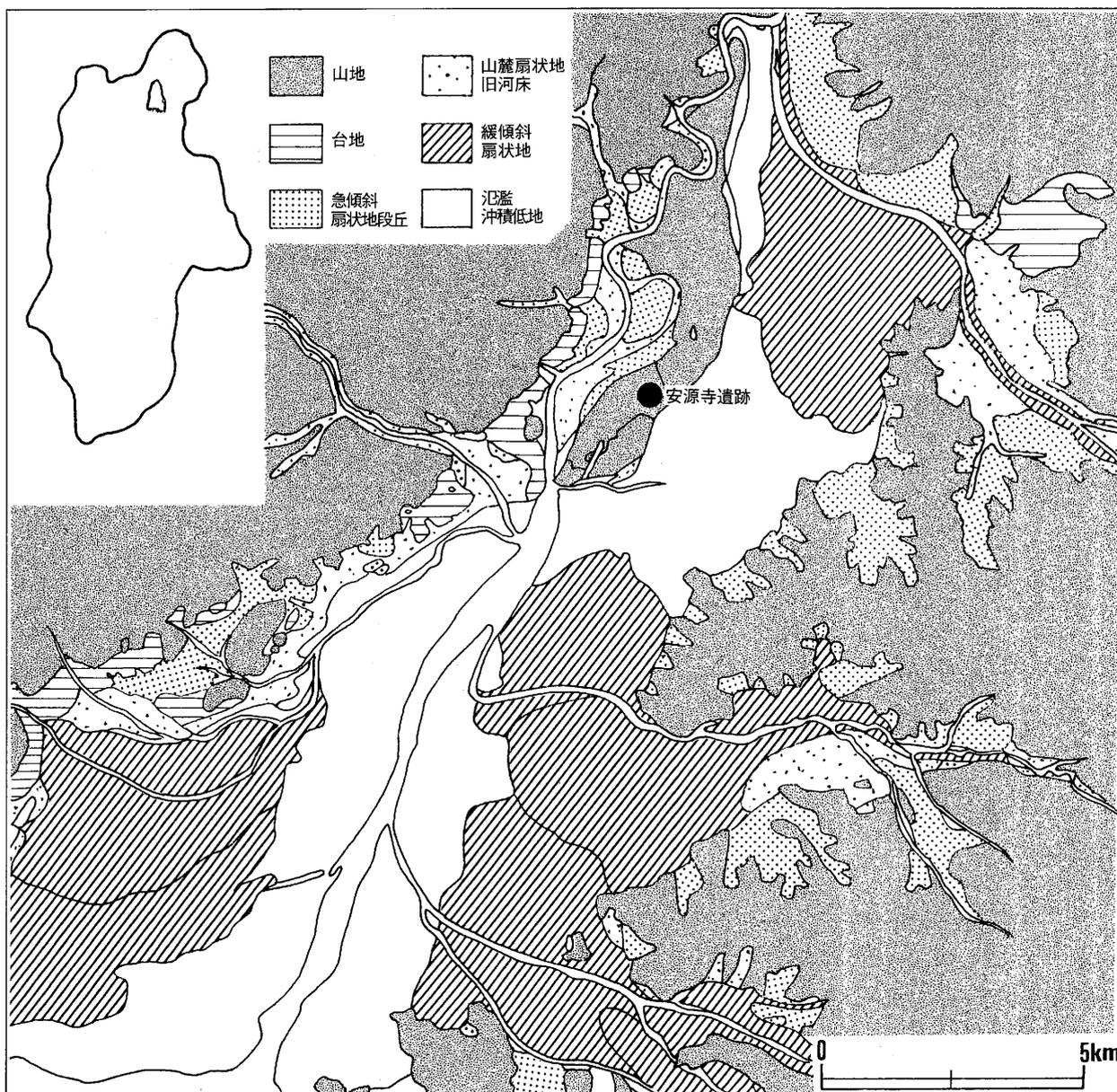
安源寺遺跡は中野市大字安源寺字宮裏地、峰、立道地籍を中心に広がっている。中野市の西部、中野市を東西に横断する県道29号線の安源寺交差点付近の高丘丘陵西斜面上一帯である。

中野市は長野盆地の北端に位置している。盆地の中央を流れた千曲川は、盆地の北端にいたると、盆地の西縁を形成する西部山地の裾部をかんにゆ

う蛇行し、南北に細長い丘陵を分離する。

こうして、形成された丘陵が高丘長峯丘陵である。急峻な山地状の地形をなす丘陵北側部分を長峯丘陵と呼ぶ。それに対して、南側部分は高丘丘陵と呼ばれ、ゆるやかな丘陵となっている。

遺跡は長峯丘陵部と高丘丘陵が接する部分の高丘丘陵上に広がる。南北に延びる高丘丘陵の東縁は崖状に盆地低地部と接する。反対に、西縁はゆるやかな傾斜を持ちながら、千曲川に接し、河岸段丘を形成している。遺跡は丘陵の鞍部から西斜面にかけて広がっている。



第1図 遺跡の位置

第2節 安源寺遺跡のこれまでの調査

遺跡は東西約300m、南北800mの広さを持ち、旧石器時代から近世に及ぶ複合遺跡である。安源寺遺跡の調査の歴史は長く、大正時代のはじめに編纂された『高丘村誌』にはすでに安源寺遺跡が記載され、大正11年に刊行された『下高井郡誌』においても、土器や石器が紹介されている。

昭和23年には小野勝年氏によって、栗林遺跡の発掘調査が行われ、その報告書の中で安源寺遺跡が縄文時代から古代にかけての複合遺跡であることが報告されている（坪井他・1953）。昭和26年、高丘小学校（神田五六他）による調査が実施され、弥生時代後期の住居址が発見され、安源寺が弥生後期の集落址であることが確認された（田川・1951）。昭和29年には県道拡幅工事が行われ、その際に登窯が確認されている。

昭和40年には県道拡幅工事が実施され、その工事の際に土師器を伴う住居址3基が確認された（金井・1967）。

昭和41年には県道拡幅工事に伴う発掘調査が実施され、旧石器時代の石器、縄文時代前期、中期の土器及び石器、弥生時代後期の土壙墓（23基）、須恵器登窯などを検出している（中野市教育委員会・1967）。

昭和51年住宅建設に伴う事前調査が行われ、旧石器時代から中世の遺構が発見された。和泉期の土器片を伴う半地下式の平窯が発見されている。この窯の東南側に、4×8mの範囲に良質な粘土が確認された。人為的に集積した可能性が指摘されている（壇原他・1979）。

昭和59年には住宅建設に伴う事前調査が実施され、弥生時代中期後半（栗林式）の住居址が発見された。

また、昭和61年には県営畑地総合土地改良事業に伴い（壇原他・1987）発掘調査が行われ、住居址や溝が発見した。

平成6年には今回の調査区に隣接する部分の発掘調査が実施された。前方後方形の周溝墓と粘土採掘坑が発見された。

第3節 安源寺遺跡の概要

1. 旧石器時代

昭和41年の発掘調査で、台形様石器や基部を加工したのみのナイフ形石器が発見されている。後期旧石器時代前半期のものと考えられるが、いずれもグリット出土遺物として採取されている。また、昭和51年の調査の際にも、旧石器が検出されており、一帯に旧石器時代の遺跡が存在している可能性が高い。

2. 縄文時代

前期、中期の土器片及び土偶、石鏃、打製石斧などが発見されているが、遺構は検出されていない。

3. 弥生時代

栗林期から箱清水式期までの土壙墓、住居址などが発見されている。特に、土壙墓は後期中葉の墓制を考えるうえで重要な事例である。

(1) 住居址

昭和54年度調査（第三次）には4基の住居址、昭和62年度調査（第四次）では20基の住居址が検出されている（壇原長則他・1987）。

ただし、昭和62年度調査は灌漑パイプを埋設するために行われた発掘調査で、調査区の幅が2mと狭く、全形を確認していない。そのため、今後の調査で変更される可能性があるが、当該地に相当規模の大きな集落が営まれていたと考えている。

(2) 周溝墓

昭和26年、神田五六の指導のもと、田川幸雄が発掘調査を実施した。当時は弥生後期の変形住居であると考えられたが、その後の調査で、周溝墓ではないかと指摘されている。

また、昭和62年度の調査で、幅約2m溝を9箇所確認している。先述したように昭和62年度の調査は幅約2mと狭いため断定ができないが、周溝墓である可能性が高い。

平成6年度の調査では前方後円墳形の周溝墓が1基確認されている。

(3) 土壙墓

昭和41年度調査（第二次）で合計13基の土壙墓が、昭和54年度（第三次）発掘調査で3基の土壙墓が発見されている。ほぼ楕円形あるいは隅丸長方形の土壙墓で土器が被覆していた。注目されるものとして、土壙墓の周囲を溝が取り巻くものや柱穴を伴うものがある。

すでにふれたように、弥生時代の安源寺遺跡では、周溝墓検出されており、こうした土壙墓とは明らかに性格を異にする墓制がある。

出土土器から見ると、土壙墓は弥生後期中葉、周溝墓は後期後葉以後のものであると考えられる。

また、隣接する丘陵部には弥生後期後半から末葉に位置づけられる前方後方墳が発掘されている。

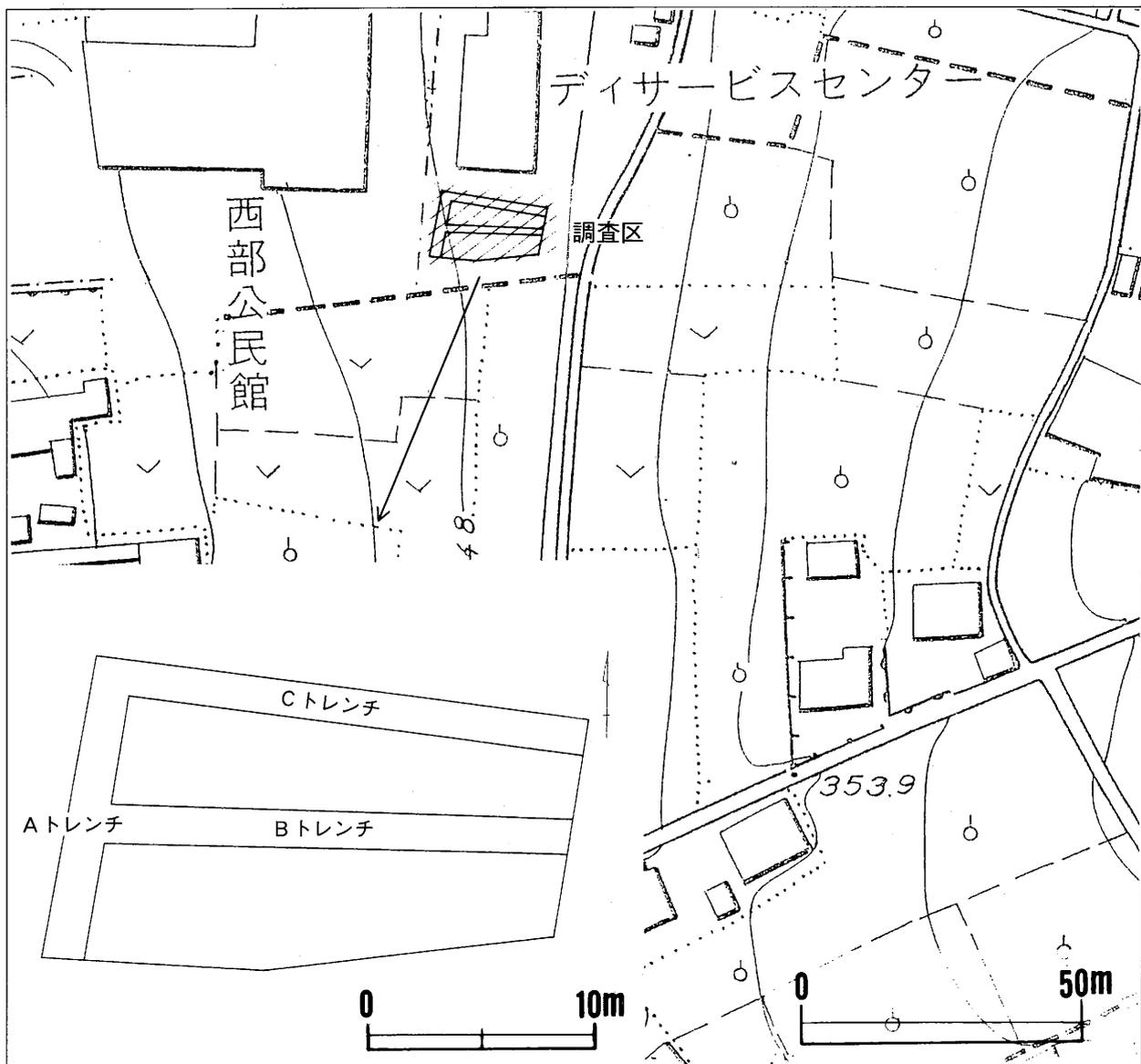
(4) 粘土採掘坑

平成6年度調査では、今回の調査区に隣接して粘土採掘坑が検出されている。想定される安源寺遺跡の西端部にあたる。

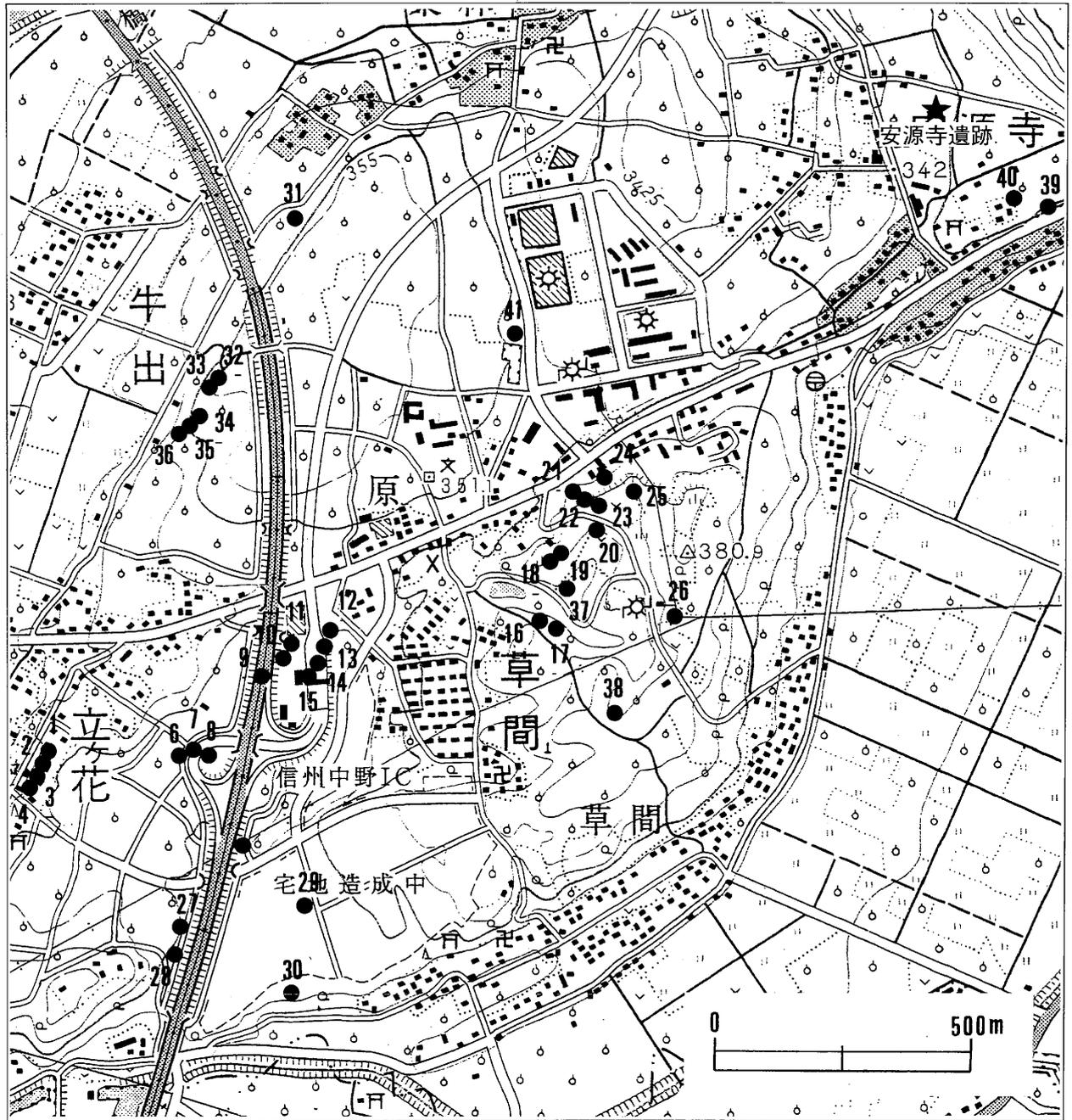
4. 奈良・平安時代

(1) 住居

昭和41年での調査で1基、昭和54年度調査で、

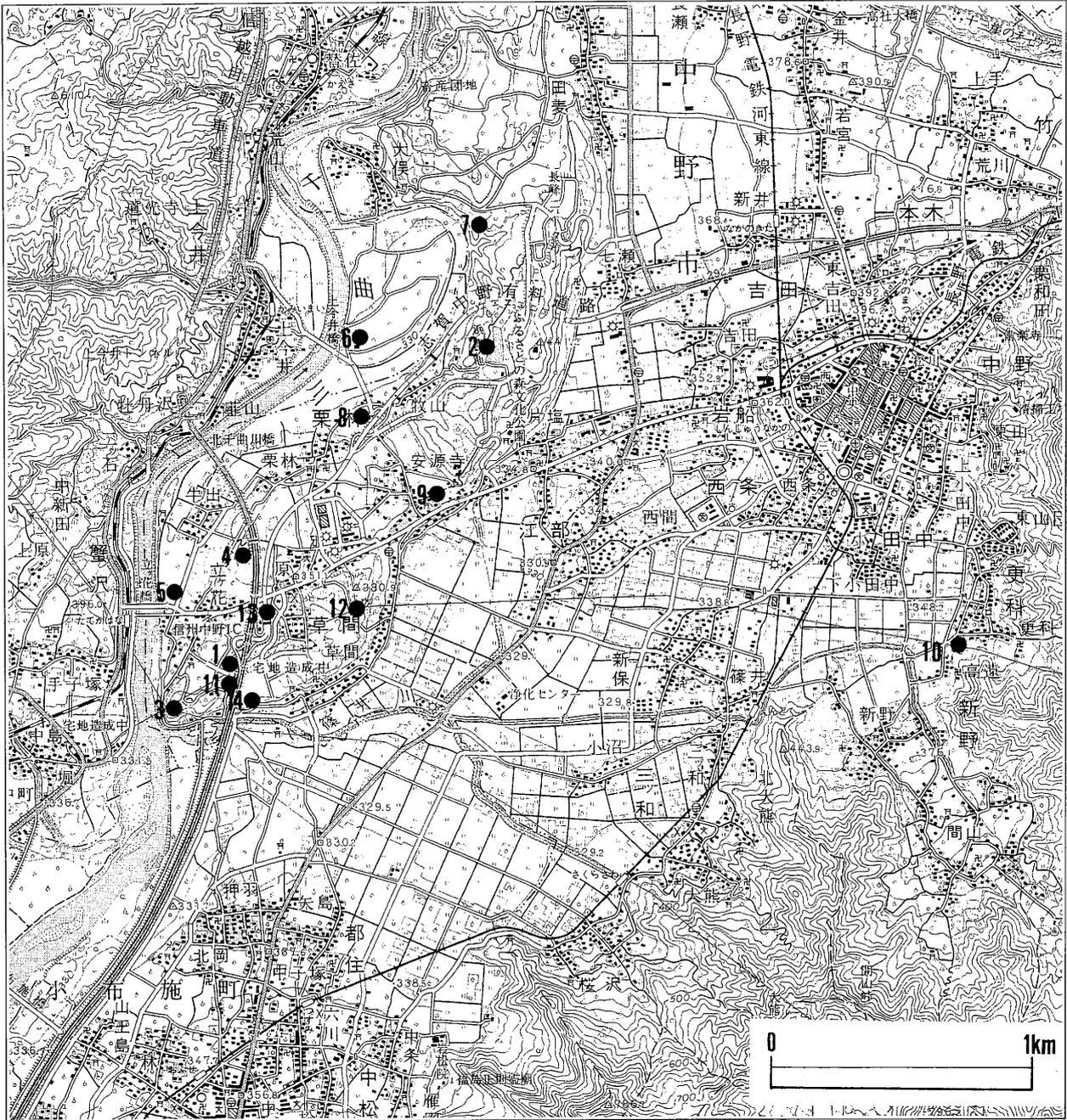


第2図 調査区



第3図 窯跡遺跡分布図

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1) 立ヶ花表山1号窯 | 2) 立ヶ花表山2号窯 | 3) 立ヶ花表山3号窯 | 4) 立ヶ花表山4号窯 |
| 5) 沢田鍋土1号灰原 | 6) 清水山3号 | 7) 清水山1号窯 | 8) 清水山2号窯 |
| 9) 池田端5号窯 | 10) 池田端4号窯 | 11) 池田端3号窯 | 12) 池田端7号窯 |
| 13) 池田端1号窯 | 14) 池田端2号窯 | 15) 池田端6号窯 | 16) 大久保3号窯 |
| 17) 大久保4号窯 | 18) 大久保2号窯 | 19) 大久保1号窯 | 20) 茶臼峯4号窯 |
| 21) 茶臼峯1号窯 | 22) 茶臼峯2号窯 | 23) 茶臼峯3号窯 | 24) 茶臼峯7号窯 |
| 25) 茶臼峯6号窯 | 26) 茶臼峯5号窯 | 27) 沢田鍋土1号窯 | 28) 沢田鍋土2号窯 |
| 29) がまん淵1号窯 | 30) 西山1号窯 | 31) 牛出1号窯 | 32) 牛出2号窯 |
| 33) 牛出3号窯 | 34) 牛出5号窯 | 35) 牛出6号窯 | 36) 牛出4号窯 |
| 37) 大久保5号窯 | 38) 上の山1号窯 | 39) 安源寺1号窯 | 40) 安源寺2号窯 |
| 41) 中原1号窯 | | | |



第4図 周辺の遺跡

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|----------|
| 1 立ヶ花表窯跡 | 2 浜津ヶ池遺跡 | 3 立ヶ花城跡 | 4 牛出窯址跡 |
| 5 立ヶ花遺跡 | 6 南大原遺跡 | 7 姥が沢遺跡 | 8 栗林遺跡 |
| 9 安源寺遺跡 | 10 高遠山古墳 | 11 沢田鍋土遺跡 | 12 高屋敷遺跡 |
| 13 池田端窯跡 | 14 がまん淵遺跡 | | |

4基の住居址を検出、昭和62年度調査で3基の住居址が確認されている。

前半代の須恵器が出土している。

(2) 窯 址

長さ約10m、幅約1.5mの登窯である。8世紀

第4節 高丘陵における粘土採掘坑の調査

今回の調査では粘土採掘坑が確認されたが、このほかにも高丘陵では沢田鍋土遺跡、池田端遺跡、がまん淵遺跡で粘土採掘坑が調査されている。更新世に形成された豊野層が良質な粘土であるためであろう。

池田端遺跡では長野県埋蔵文化財センターで1992年に行われ、奈良時代前半と平安時代の2時期の粘土採掘坑が発掘された。(鶴田・1997)

沢田鍋土遺跡は1991年、1992年、1994年に調査され(鶴田・1997)、がまん淵遺跡では1993年調査が行われ、縦穴を掘り、粘土層に達したところで粘土を採掘し、さらに水平方向に壁面粘土を採掘する方法と、掘り下げた穴を横に広げながら掘り面に出る粘土層を横に掘っていく2つの掘り方が確認されている。(鶴田・1997)

第5節 調査の方法

今回の調査は中野市デイサービスセンター建設工事に伴うものであり、平成6年度に実施したデイサービスセンター建設に伴う調査区の南側に隣接する。平成6年度の調査では粘土採掘坑が調査区の南側に続いていることが確認されており、本調査区にも粘土採掘坑が広がっていることが予想された。

調査方法として、トレンチ方式を選択した。すでに、沢田鍋土遺跡や平成6年の発掘調査で指摘されるように、遺構調査と同様な方法で、平面的な調査では、粘土採掘坑の作業単位を確認することが難しいと考え、その土層断面の観察を主体として作業単位や粘土採掘の方法を確認するために、トレンチ調査がより適当であると考えたからである。

トレンチは斜面に沿って二本(B・Cトレンチ)、斜面に直交してAトレンチ一本設定し、重機で粘土採掘坑の坑底よりも深く掘り下げ、トレンチの各壁面を観察した。

第6節 作業単位の把握

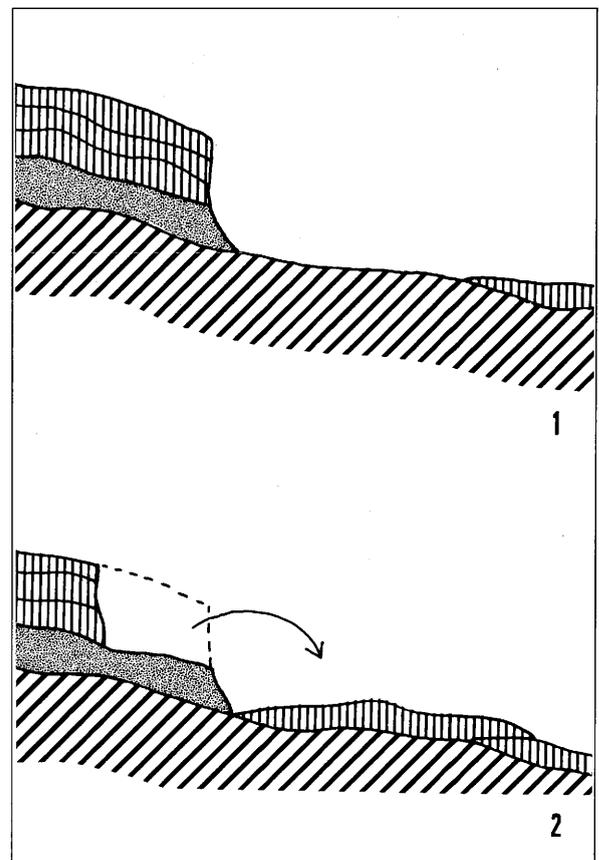
先述したように、今回の調査では粘土採掘の作

業単位を把握することに主眼をおいて調査を実施した。

トレンチの土層断面を観察すると、斜面の下方から上方に向かって、基盤層(8層)が階段状に掘り込まれていることが観察できる(模式図第5図)。この階段状に掘り込まれた一段一段が粘土採掘の一つの作業単位と考えられる。

土層は斜面下方から順次、ほぼ水平に堆積している。階段状に掘り込まれた基盤層の階段の端部からは、そこを起点とするように、黒色土をブロック状に含む3層が観察され、その上部にやはりブロックを多く含む二次堆積土をのせている。こうした土層堆積は模式図に示したように、斜面の下方から粘土を採掘し、生じた採掘坑に廃土したために生じたと考える。

また、人為的な二次堆積土と基盤層の間に、砂を含む土層(第7層)が確認される部分もある。こうした事例は粘土採掘後、若干の間、そのまま放置された時間があったことを示しているのであろう。



第5図 粘土採掘作業単位模式図

第7節 作業日誌

5月7日(火) 小雨

廃土の置き場を考慮して調査を南と北側に分け、調査区南側から重機を用いて表土を除去し始める。

耕作土は20cmほどの下位からは弥生時代後半。箱清水式の土器片を包含する黒色層が検出された。調査区南側の範囲を調査する。

粘土採掘穴と思われる遺構面まで西側にトレンチをいれる。柱状遺構をトレンチ東壁に検出する。

5月8日(水) 曇りのち晴れ

器材運びをし、地層確認作業を行う。

重機を用い、トレンチ掘りを行う。黒色層を剥がし、数基の柱状遺構を検出する。

黒色層から箱清水式土器片を検出した。

5月9日(木) 晴れ

昨日の続きトレンチ壁面の地層確認作業をする。

Bトレンチ北側壁中央に遺構を検出する。採掘坑は斜面の下から掘り始めたと思われ、新しい採掘坑の廃土を先に掘った穴に捨てるとの指摘があるが、地層断面では確認できない。また、1994年の発掘ではフラスコ状の搔きだした跡、オーバーハングが崩れた形跡が読み取れるとの所見があったが、形跡は見当たらない。

Aトレンチでは確認できなかった斜面を流れるように分層された層は、Bトレンチでは確認できる。堆積状況は黒色土に黄色のブロックが斑に入る層が下になっているが廃土を先に掘った穴に置いた形跡であろうか。遺物はまだ確認できず、年代特定は困難である。

5月10日(金) 曇り時々小雨

南側に、50cmのトレンチ4本設定し、黒色がなくなるまで掘り下げ、遺構検出をする。

セクション実測、Aトレンチ、Bトレンチの一部。

Aトレンチ西側壁、二次堆積土の中にフラスコ状の落ち込みがある。廃土を捨てたとき偶然にこのような層形成の仕方をするのであろうか、全体に二次堆積は斜面の上方から下へと流れているかのようなようである。

5月13日(月) 曇り後晴れ

トレンチ4本を掘る。C-2区に柱と土坑状の遺構を検出する。

南側部分の発掘を終了する。

5月14日(火) 晴れ

トレンチ壁面のセクション確認、Bトレンチ南側面の遺構検出作業を行う。

重機を用いて調査区の残り、北側部の剥ぎを行う。3本目のCトレンチを調査区の北側に東西に入れる。重機による表土剥ぎを黒色土層までとした。何点かの柱状遺構を検出する。

5月15日(水) 晴れ

重機はトレンチ掘り、表土剥ぎを行う。

CトレンチとBトレンチ間の遺構検出を行う。

5月16日(木) 晴れのち小雨

砂岩製の砥石石器を黒色層より出土。

前回発掘で確認された粘土採掘坑は南側調査区中央付近から西側、南東に範囲を拡大しながら存在したが、今回の調査でもその続きが確認でき、調査区全体に広がりを見せている。

5月17日(金) 雨

雨のため作業中止。

5月20日(月) 曇り時々晴れ

遺構検出をし掘り始める。

重機を用いて西側調査区の表土剥ぎを行う。

細石刃と思われる石器が一点出土する

一部欠損した石鏃が出土

土坑から鉄器が一点炭層の下から出土

5月21日(火) 曇りのち晴れ

遺構完掘作業を行い、実測を常時行う。

土坑完掘。

前日に確認された西側の落ち込みは地形的なくぼ地である可能性が高いことが判明した。

柱状遺構は丸と方形が混在しているが、西側部に方形が多く径は小さく10~20cmが主である。遺物はなく時代は特定できず。

5月22日(水) 晴れ

撤収作業を行う。

埋め戻しをし、現場作業を終了する。

5月23日より作業整理を始める

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 遺 構

1. 粘土採掘坑 Aトレンチ (第6図) で検出された遺構

調査区の最も西側の部分に、斜面に直交するように設定した。南北に13mを測る。合計6基の粘土採掘の作業単位を確認した。

(1) 第1号粘土採掘坑

第1号粘土採掘坑はAトレンチのほぼ中央に位置し、斜面に直交する方向(南北)に約5m、斜面と平行する方向に約3mの規模で検出された。二次堆積層の厚さは約30cmある。

第1号粘土採掘坑はAトレンチに確認された粘土採掘坑の中で最も古いもので、両側に位置する第2号、第3号粘土採掘坑の両側から、第1号粘土採掘坑の二次堆積土を覆うように、第2号、第3号粘土採掘坑の二次堆積土が堆積している。

二次堆積土中に幅80、厚さ35cmの灰色粘土のブロックを検出している。採取目的の粘土が混入したと考えている。

(2) 第2号粘土採掘坑

第2号粘土採掘坑は第1号粘土採掘坑の南側に位置し、斜面に直交する方向(南北)に約2mの規模をもつ。第1号粘土採掘坑が掘られた後、採掘されたと考える。

(3) 第3号粘土採掘坑

第3号粘土採掘坑は第1号粘土採掘坑の北側に隣接し、規模は南北1mである。Aトレンチの東側壁面には確認できない。土層を確認すると第3号土坑の二次堆積土が1号、2号粘土採掘坑の二次堆積土を覆うように堆積していることから、第1号、第2号、第3号粘土採掘坑の順序で粘土が採掘されたことが理解できる。

(4) 第4号粘土採掘坑

第4号粘土採掘坑は第3号粘土採掘坑に隣接し、その二次堆積土は第3号粘土採掘坑の二次堆積土を覆っている。

規模は南北1mを計測し、二次堆積土は4層で約10cmを計測する。

(5) 第5号粘土採掘坑

第5号粘土採掘坑は第4号粘土採掘坑の北側に隣接し、その二次堆積土は4号粘土採掘坑の二次堆積土を覆っている。規模は南北1.5m、二次堆積土は6層で厚さは約30cmを計測する。

(6) 第6号粘土採掘坑

第6号粘土採掘坑は第5号粘土採掘坑の北側に隣接する。その二次堆積土は第5号粘土採掘坑の二次堆積土を覆っている。規模は東西約1.5m、二次堆積土の厚さは約20cmを計測する。

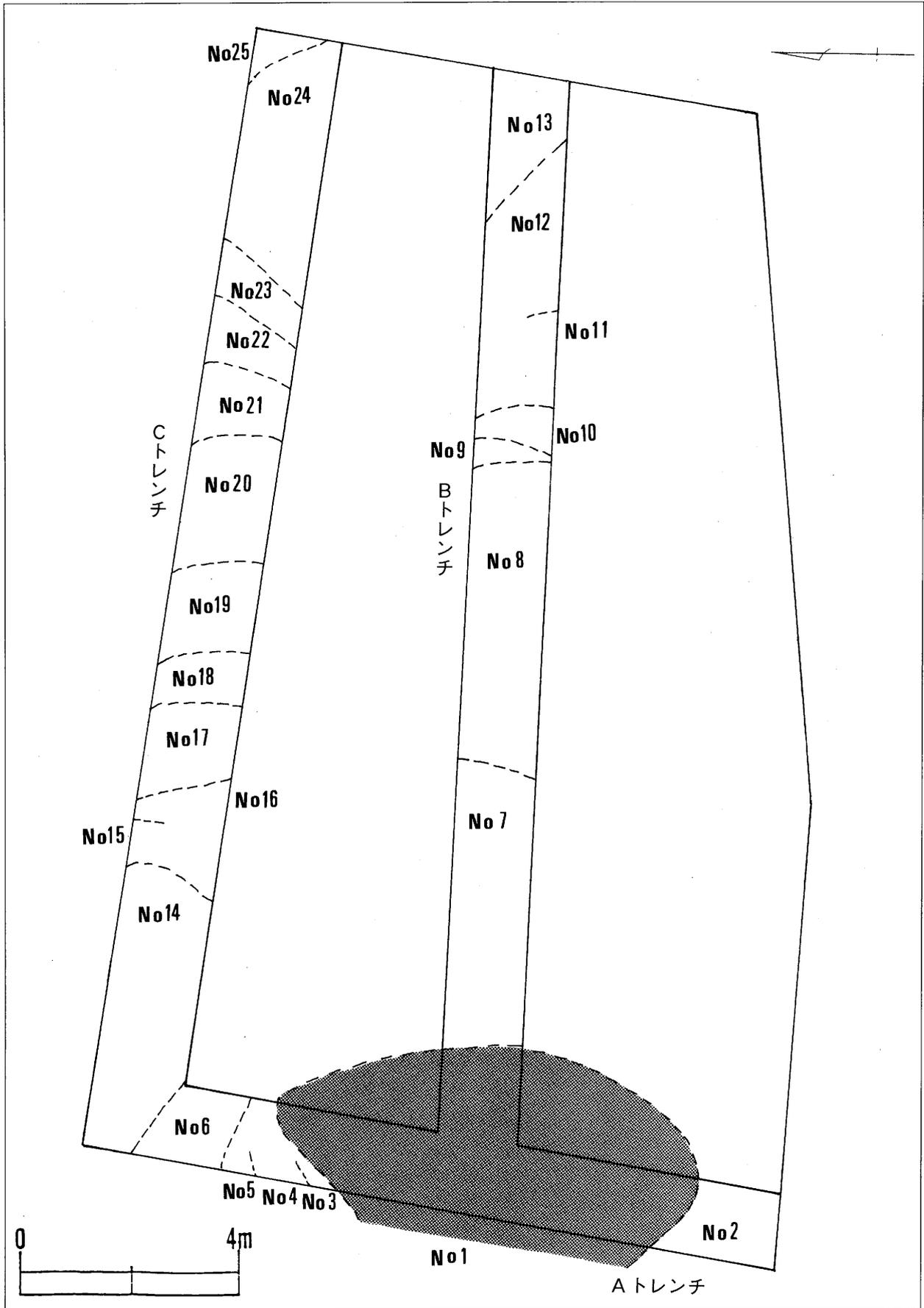
2. Bトレンチで検出された遺構 (第6図)

調査区の南端から、北へ4mの位置に、東西10mの長さで、斜面に平行して設置した。Cトレンチと西側で4.5m、東側で2.8m離れ、ほぼ平行している。

土層断面観察は北壁、南壁の両面で行っている。確認できた粘土採掘坑は8基ある。北壁と南壁に見えた粘土採掘坑の二次堆積土の同様な層を結ぶと、平面的には模式図第6図のようになる。ただし、同様な層が幾層かあるため、模式図に示した範囲を作業単位として、確定するには若干無理があるかも知れない。

(1) 第7号粘土採掘坑

Bトレンチの最も西側に確認された粘土採掘坑で、Aトレンチの第1号粘土採掘坑の東側(斜面上方)にある。東西方向に約4mの規模をもち、幅約1.5mのBトレンチの両壁面に二次堆積土が観察できる。二次堆積は上部からの廃土だけでは



第6図 粘土採掘坑遺構

なく、左右からの廃土で複雑な層を成しているものと考える。

(2) 第8号粘土採掘坑

第8号粘土採掘坑は第9号粘土採掘坑の西側に隣接し、調査区で最も大型な粘土採掘坑で東西に約6mの規模を持つ。約20cmの二次堆積が第8号粘土採掘坑全体を覆っている。

第7号粘土採掘坑との隣接付近に地層のずれ(断層)があり、不明瞭であるが二次堆積は第7号粘土採掘坑の二次堆積を覆っていると考える。

硬く締まった厚さ5cmの層は水平にテラス状を示している。粘土または廃土の搬出路か作業通路と考える。

(3) 第9号粘土採掘坑

第9号粘土採掘坑は第8号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第8号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に1m、二次堆積の厚さは約15cmを計測する。

二次堆積層はトレンチ南壁よりトレンチ北壁に粘土採掘坑の広がりを見せている。

(4) 第10号粘土採掘坑

第10号粘土採掘坑は第9号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第9号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に約1m、二次堆積の厚さは10cmを計測する。

(5) 第11号粘土採掘坑

第11号粘土採掘坑は第10号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第10号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に1.7m、二次堆積の厚さは6cmを計測する。

トレンチ南壁面に見えている二次堆積層はトレンチ北壁面には確認出来ず、第11号粘土採掘坑は南側に広がっていると考える。

(6) 第12号粘土採掘坑

第12号粘土採掘坑は第11号粘土採掘坑の東側に

隣接し、その二次堆積の第11号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模はトレンチ南壁面で約3m、トレンチ北壁面は約3.5m、二次堆積の厚さは40cmを計測する。二次堆積層はトレンチ南壁側が東よりで、第12号粘土採掘坑はトレンチ東側に広がっていると考える。

(7) 第13号粘土採掘坑

第13号粘土採掘坑は第12号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積の第12号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は第13号粘土採掘坑の範囲が調査区外にかかるため判然としない。二次堆積の厚さは約30cmを計測する。

3. Cトレンチで検出された遺構(第6図)

調査区の北から約1.5mの距離を置き、Bトレンチに平行するように東西に設定した。長さは約20m、斜面に平行し、Bトレンチとは東側で2.8m、西側で4.5m離れている。

Bトレンチと同様に、北側と南側の両面を観察し、確認された粘土採掘坑は11基である。

(1) 第14号粘土採掘坑

第14号粘土採掘坑は第6号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は西側調査区外に及んでいる。規模はトレンチ南壁面で東西に約3.5m、トレンチ北壁面は調査区外まで広がり、全容は確認できない。二次堆積の厚さは約25cmを計測する。

(2) 第15号粘土採掘坑

第15号粘土採掘坑は第14号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第14号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模はトレンチ北壁面に東西約1mあるが、南側には相当する層は確認出来ない。第15号粘土採掘坑は北側に広がっていると考える。

(3) 第16号粘土採掘坑

第16号粘土採掘坑は第14・15号粘土採掘坑の東

側に隣接し、その二次堆積は第14・15号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に約2.5m、二次堆積の厚さは30cmを計測する。

(4) 第17号粘土採掘坑

第17号粘土採掘坑は第16号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第16号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に約1.5m、二次堆積の厚さは約40cmを計測する。

底部に堀工具によると思われる掻きだし痕がある。

(5) 第18号粘土採掘坑

第18号粘土採掘坑は第17号粘土採掘坑に隣接し、その二次堆積は第17号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に約1.5m、二次堆積の厚さは約30cmを計測する。

(6) 第19号粘土採掘坑

第19号粘土採掘坑は第18号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第18号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に約1.6m、二次堆積の厚さは約10cmを計測する。

(7) 第20号粘土採掘坑

第20号粘土採掘坑は第19号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第19号粘土採掘坑までは至らない。規模は東西に約2.3m、二次堆積の厚さは約10cmを計測する。

南壁面に厚さ約7cmで硬く締まった層が2mある。粘土・廃土の搬出路または作業通路と考える。

(8) 第21号粘土採掘坑

第21号粘土採掘坑は第20号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第20号粘土採掘坑と第19号粘土採掘坑の二次堆積の一部を覆っている。規模は東西に約1.5m、二次堆積の厚さは約20cmを計測する。

底部に採掘目的粘土と思われる9層が幅10cm、厚さ約5cmである。

(9) 第22号粘土採掘坑

第22号粘土採掘坑は第21号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第21号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は東西に約1m、二次堆積の厚さは約20cmを計測する。

(10) 第23号粘土採掘坑

第23号粘土採掘坑は第22号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第22号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。規模は約2m、二次堆積の厚さは約35cmを計測する。

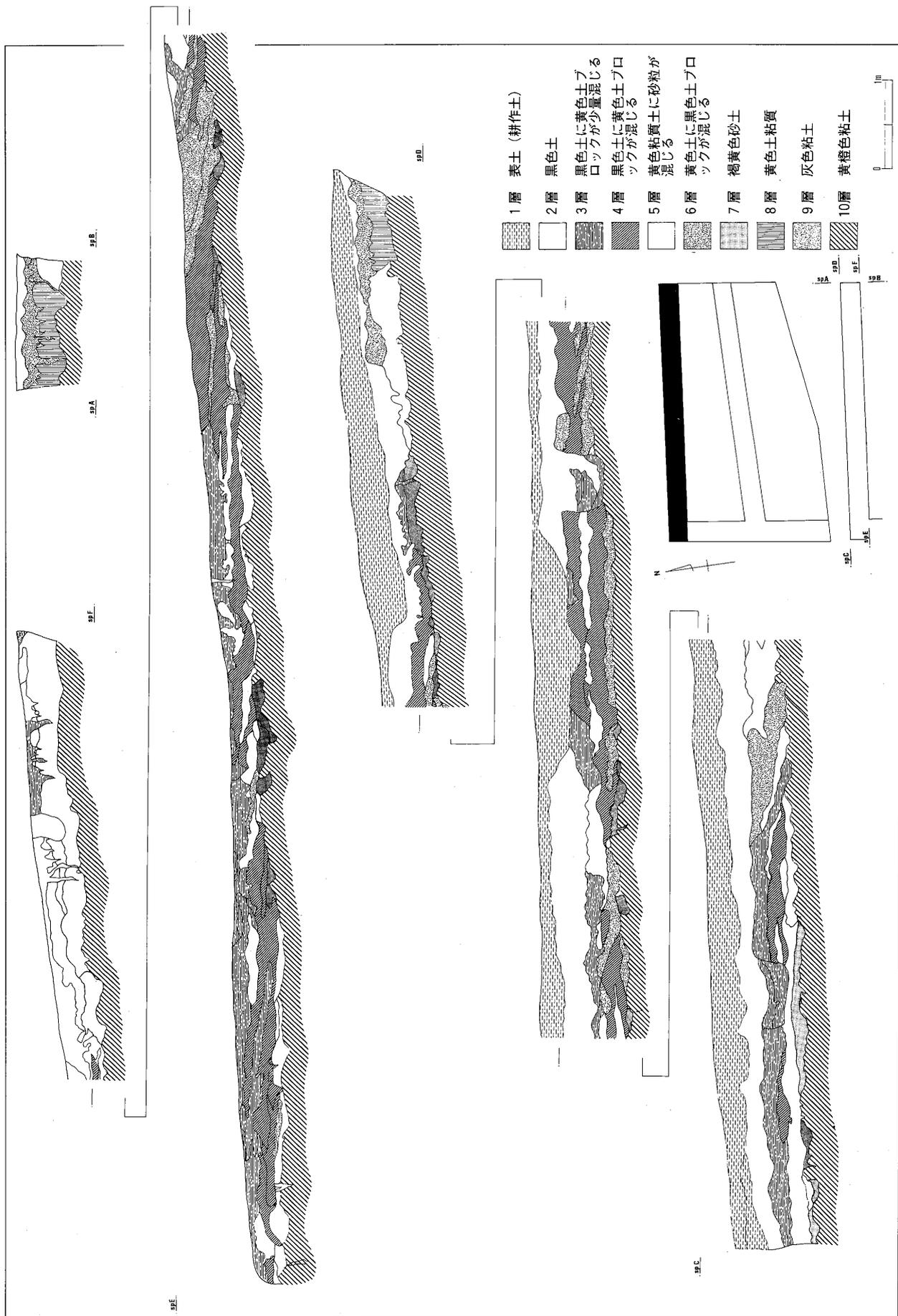
(11) 第24号粘土採掘坑

第24号粘土採掘坑は第23号粘土採掘坑の東側に隣接し、その二次堆積は第24号粘土採掘坑の三分の一を覆っている。規模はトレンチ北壁面に約3m、トレンチ南壁面に約5mを測り、Cトレンチ南側に第24号粘土採掘坑の範囲を広げている。二次堆積は3層で厚さは約30cmを計測する。

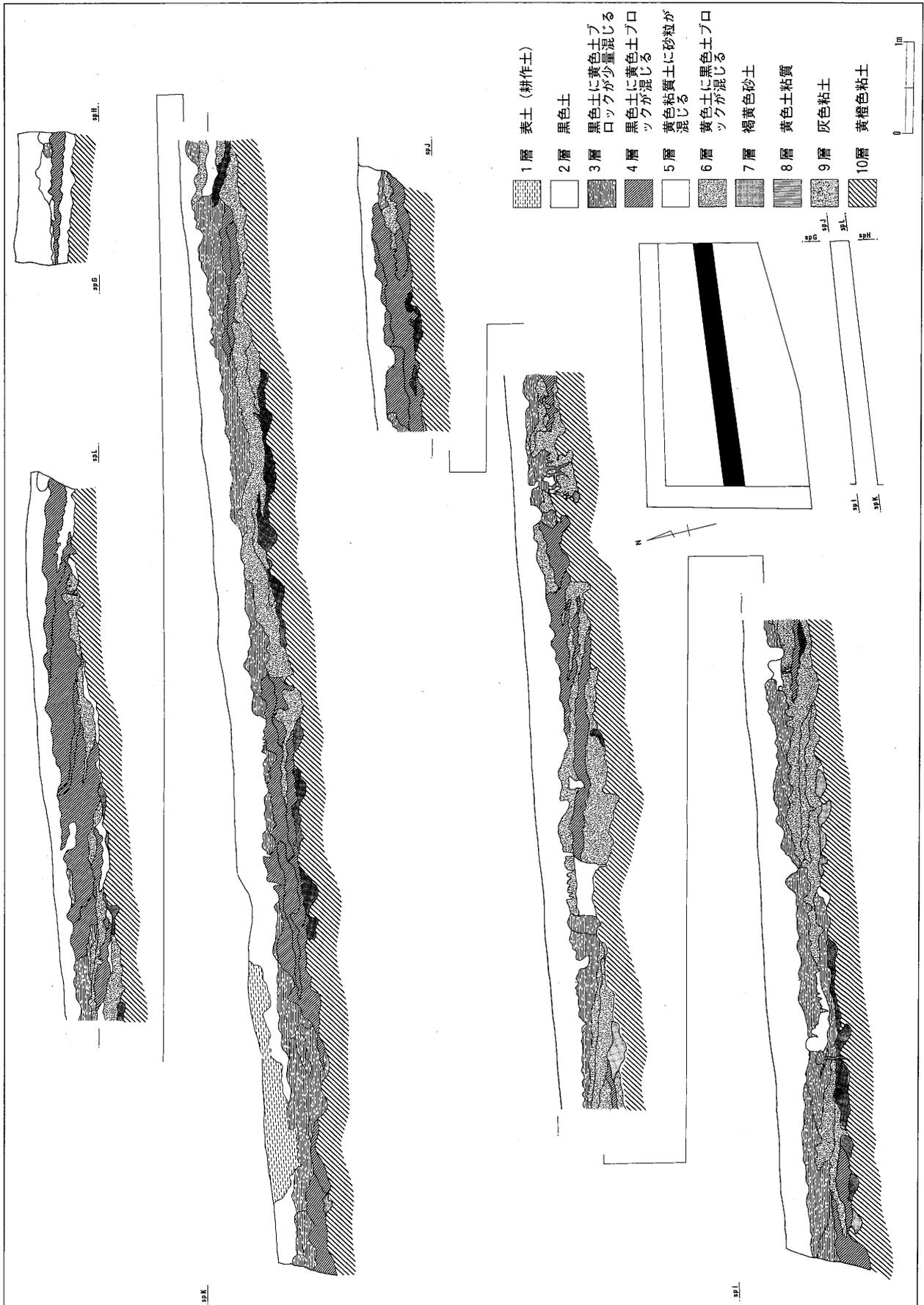
第25号粘土採掘坑の下層にある8層をオーバーハング状に掘り込んである。

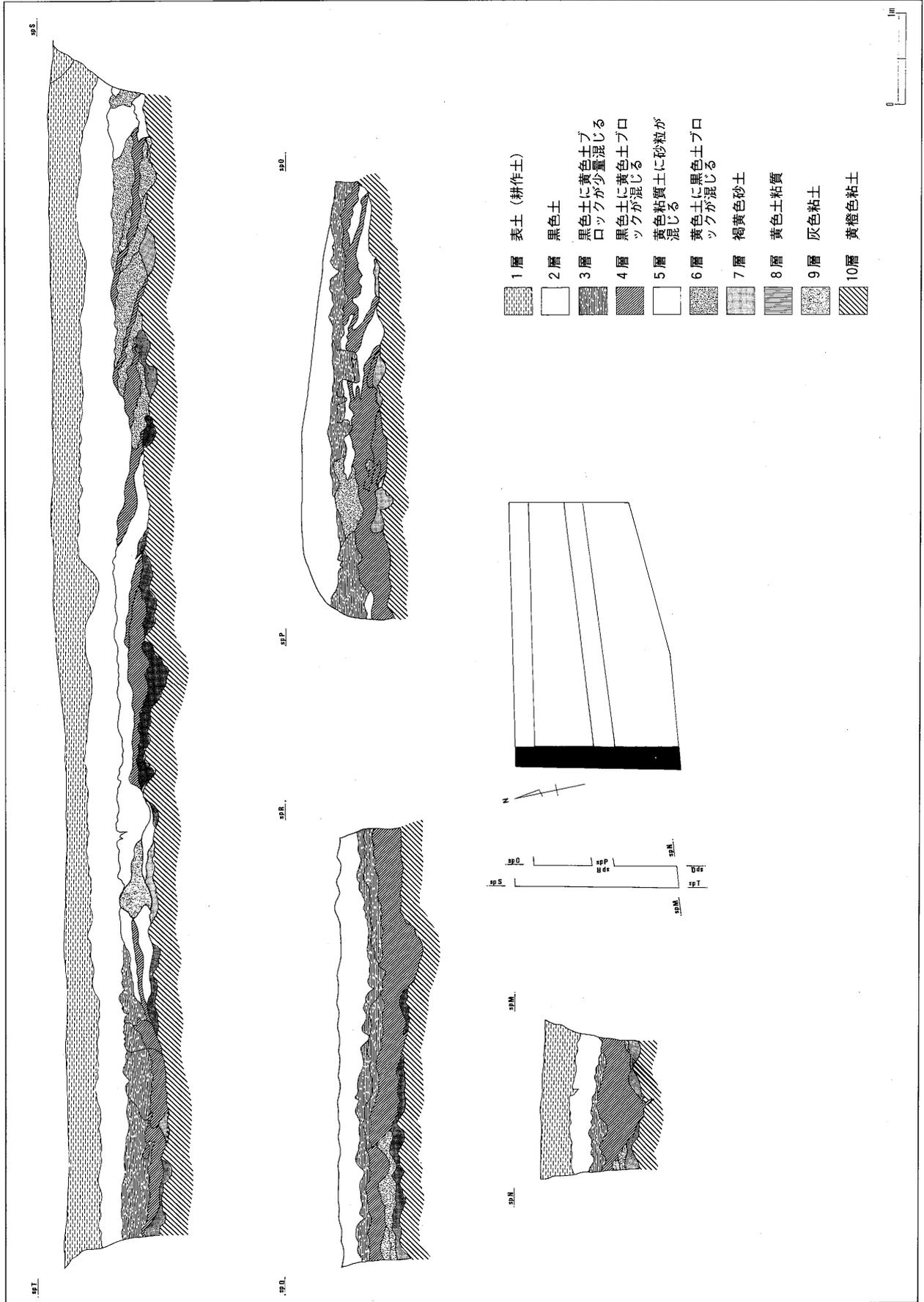
(12) 第25号粘土採掘坑

第25号粘土採掘坑はプライマリーな8層が10層の直上にあり9層がなく、採掘坑であるとは断言できない。しかし8層の直上に二次堆積層4層があるため採掘坑とした。全容は調査区外に採掘坑が至るため明らかではないが、二次堆積は第24号粘土採掘坑の二次堆積を覆っている。二次堆積は6層で約20cmを計測する。



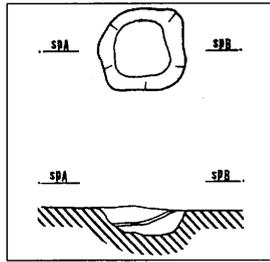
第7図 Bトレンチ・断面図





4. 土 坑

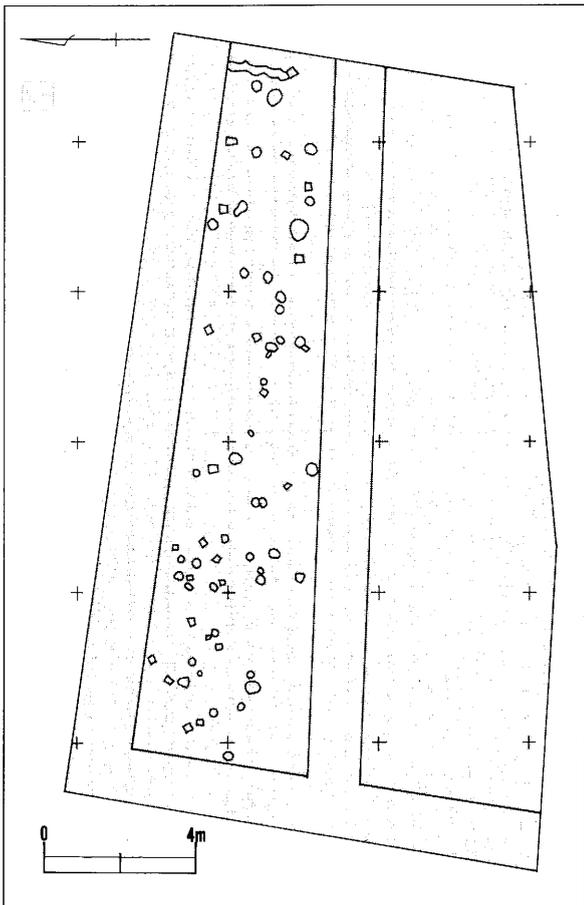
円形で径は70cmを測り、深さは20cmである。層は3層に分けられ1層と3層の間に1cmほど炭が斜めに入った層があり、その直下より鉄製品が出土した。鉄製品は正体不明で他の遺物がなく、遺構の性格・時代は特定できない。



第10図 土坑No.1

5. 柱穴状遺構

柱状遺構は丸形と方形が混在しているが、西側よりの柱状遺構が小型で方形が多い。形態が不定形のため、建物としての遺構は確認できなかった。



第11図 遺構図

第2節 遺 物

1. 土 器 (第12図)

1は篋描の1条の沈線文、2～6は櫛描波状文、7は櫛描波状文に斜行櫛描文、8は櫛描T字文、9～10・13は櫛描文、11～12・14は櫛描平行文に櫛描波状文が認められる。

2. 鉄 器 (第12図18)

土坑より出土し、形状はさびがあり特定できないが鋭角な穂先のような形状であるが先端部が欠損している。

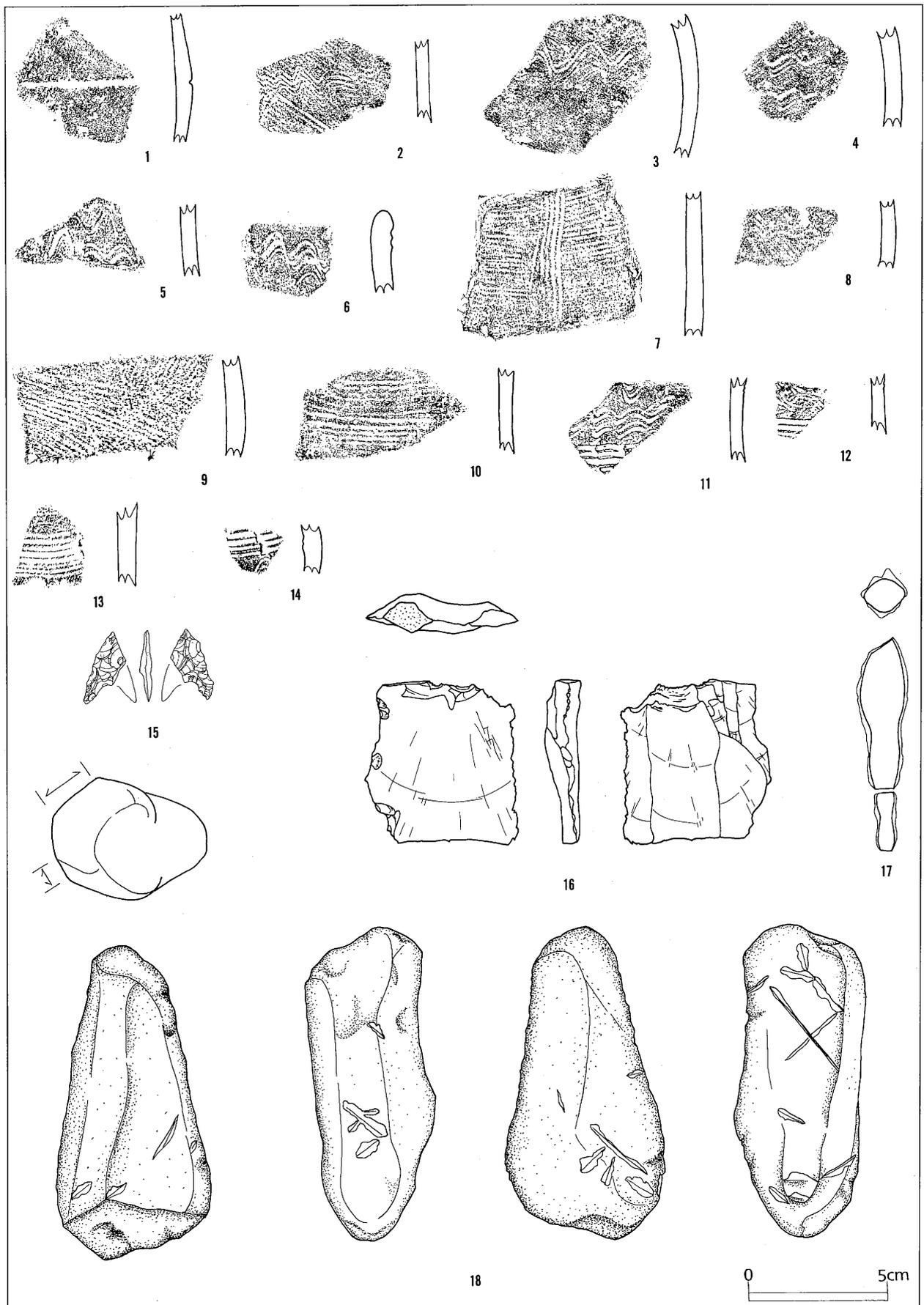
3. 石 器 (第12図18. 15. 16)

砥石 砂岩製で線刻かのはっきりしない棒状なものを磨いたと思われる溝が数箇所、及び砥石として使われた思える面が2箇所確認できる。時代は特定できないがⅢ層より出土しており弥生時代後期とした。

石鏃 安山岩製で一部欠損している。縄文期であろうか。

石刃 耕作土から表採され、時代は特定できないが旧石器と思われる。

細石刃 Ⅲ層から出土した。1994年調査で細石刃のコアが出土しており旧石器時代の遺跡が斜面上方にあることを予感させる。



第12图 遺物

第Ⅲ章 小 結

第1節 Aトレンチの所見

1. 第1号、2号、3号粘土採掘坑について
Aトレンチは斜面に直交するように、南北に設定したトレンチである。このトレンチでは斜面の上方に向かって、掘り進める粘土採掘の横方向の土層堆積を観察した結果となっている。

模式図第13図に示したように、第1号粘土採掘坑はAトレンチのなかでは最も古いものである。第1号粘土採掘坑の二次堆積土の上を、その両側にある第2、3号粘土採掘坑からの二次堆積土が覆っている。

第1号粘土採掘坑の伴う二次堆積土の範囲は、Aトレンチ西側壁面に観察される。二次堆積土は西壁面が薄く、東壁面は厚い。断面は背の低い板蒲鉾状を呈する。

その範囲は模式図第13図のトーンをかけた範囲と推測される。斜面上方（東壁面）が厚く、斜面下方（西壁面）が薄いことから、この堆積土は斜面上方から破棄されたものと考えられる。この二次堆積土の範囲が1つの作業単位を平面的に表現しているのではないだろうか。

また、粘土採掘は基本的には斜面上方に向かって掘り進められ、その後に両側へと拡張されたものと考えられる。

第2節 採掘底部に見られるバケツ状の落ち込み

粘土採掘坑の底部分に断面U字状を呈したバケツ状の落ち込みを何箇所かで確認できる（第1、7、9、12、14、16、17、19、23、24）。いずれも、直径8cm、深さ8cmと規模も形状も良く似ている。

このバケツ状の落ち込みの底部には砂状あるいは小礫を含む第7層が堆積していることが多い。第7層は自然堆積した土層と考えられ、粘土採掘の後、地表として露出していた部分（二次体積土・廃土に覆われない部分）とも考えられ、採掘時の採掘坑のあり方を示しているのではなかろうか。

また、その形状や規模が同様のことから、同様の道具を使用して粘土が採掘されていたとも考えられる。

第3節 粘土採掘坑の特徴

今回の調査では断面セクションを用いて、粘土採掘坑のあり方を観察した。その結果はこれまで述べてきたが、ここで改めて、粘土採掘坑とした根拠について触れておきたい。

- (1) 自然層で、認められる灰白色の粘土層が抜け落ちている。
- (2) 底部分に断面U字状を呈したバケツ状の落ち込みがある。
- (3) 踏み固められたテラス状の堆積層が認められる。
- (4) 堆積状態に規則性が認められる。
- (5) 採掘目的粘土が二次堆積土に含まれない。
- (6) 平面プランが不整形である。
- (7) プライマリーな壁面がオーバーハング状を示す。

第4節 昭和6年調査結果との対比

平成6年度の調査では粘土採掘坑の作業の順序を「まず、一人一人が作業できるほどの適当な大きさに、目的となる粘土層にいたるまで堅穴を掘る。次に、適当な方向に粘土層を横穴状に広げる」と考えたが、今回の調査区での粘土採掘は堅穴をほり、次々に斜面の上方や横方向に表土から掘り込み、生じた廃土はその前に採掘した粘土採掘坑に廃棄したように考えられる。

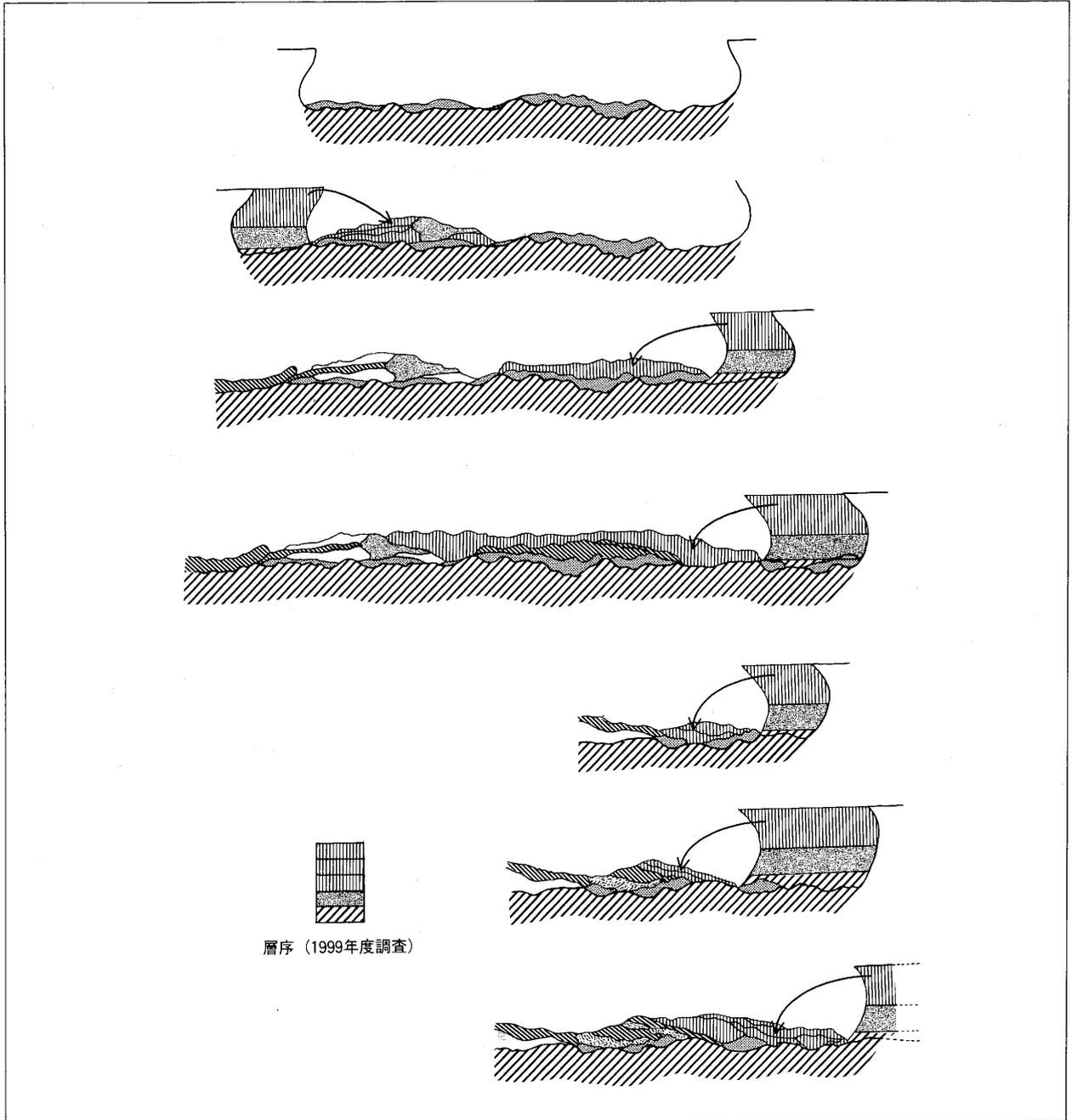
平成6年度、今回の調査において、弥生後期の土器片が検出されており、弥生時代後期のものと考えておきたい。

第5節 まとめ

安源寺遺跡は東西約300m、南北800mに及び大きな遺跡である。

先述したように、これまで何回かの部分的な調査が実施されている。

それらの調査を踏まえると、旧石器時代、縄文



第13図 粘土採掘坑No.1 模式図

時代、弥生時代、古代、中世、近世の複合遺跡である。

先述したように、弥生時代の遺構として、住居、土壙墓、方形周溝墓などが確認されており、弥生時代は北信濃の弥生集落の構造を知るうえで重要なものである。

また、今回調査した粘土採掘坑が弥生時代のものであると考えれば、弥生集落の一部で粘土採掘が行われたものと推測される。

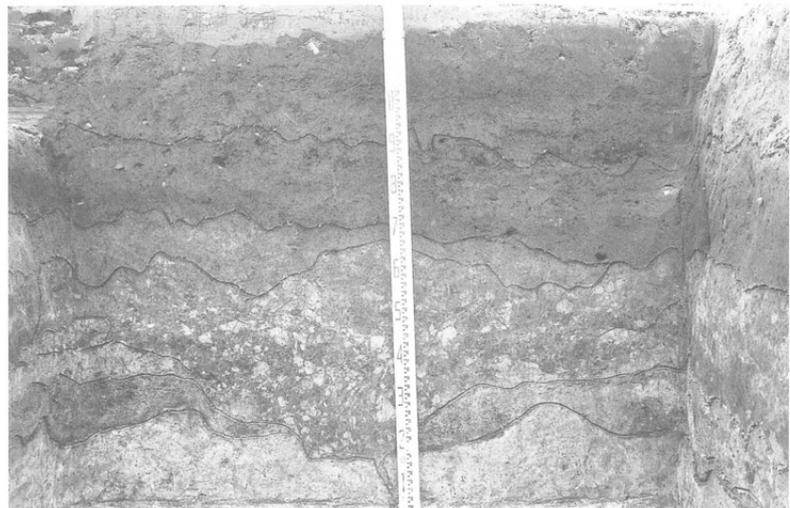
写真図版



A トレンチ地層断面(1)



A トレンチ地層断面(2)



A トレンチ地層断面(3)

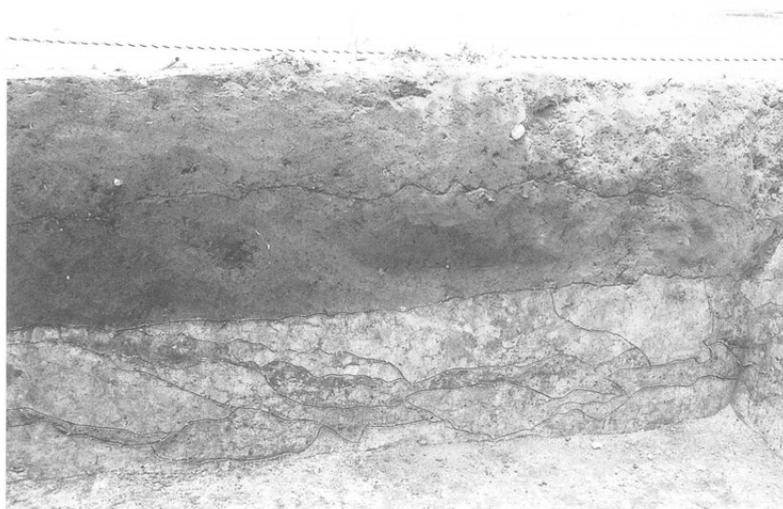
図版 2



A トレンチ地層断面(4)



A トレンチ地層断面(5)



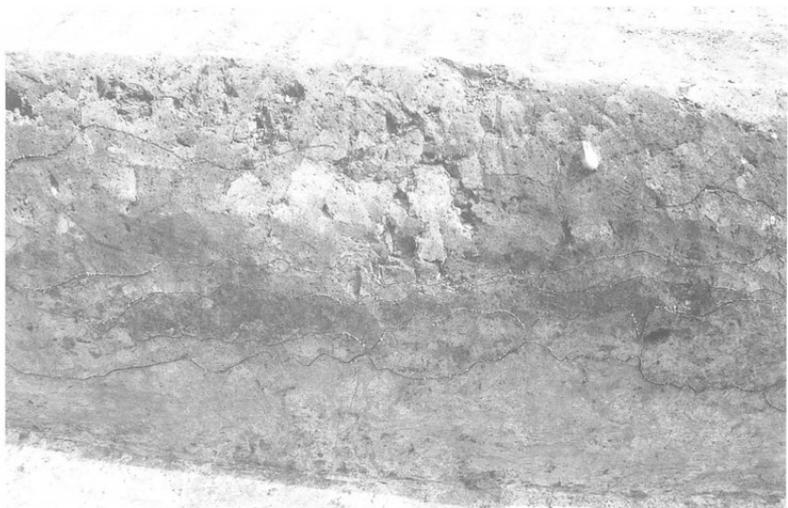
A トレンチ地層断面(6)



B トレンチ地層断面(1)



B トレンチ地層断面(2)



B トレンチ地層断面(3)

図版 4



B トレンチ地層断面(4)



B トレンチ地層断面(5)



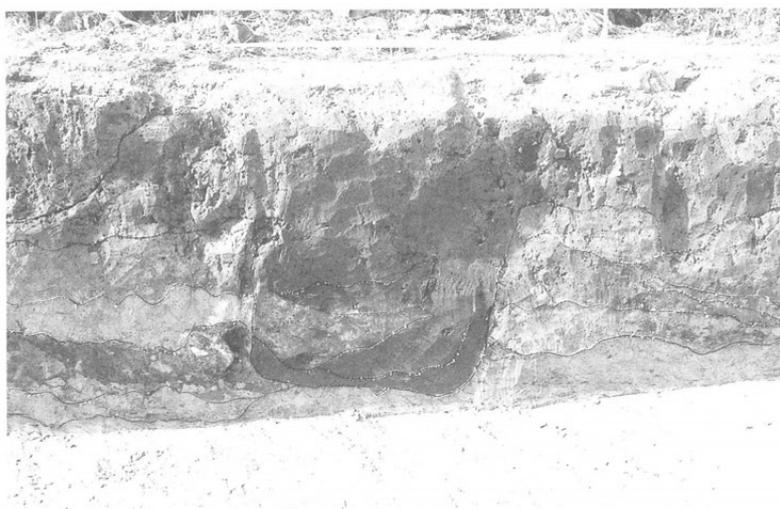
B トレンチ地層断面(6)



C トレンチ地層断面(1)



C トレンチ地層断面(2)



C トレンチ地層断面(3)

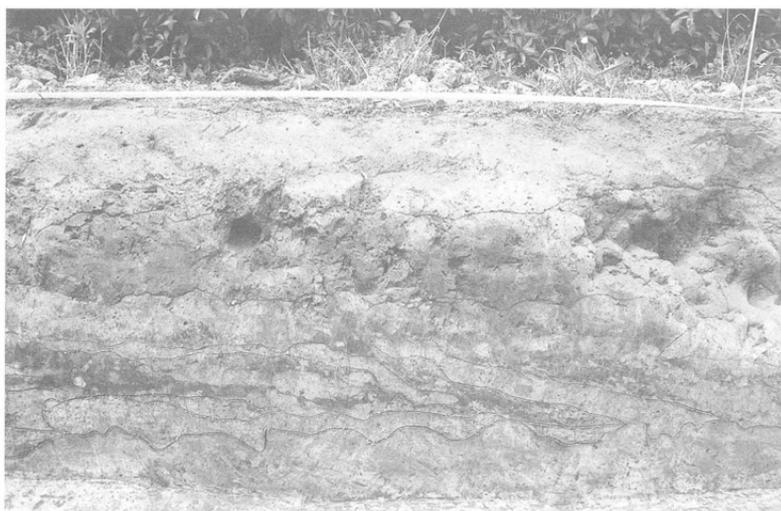
図版 6



Cトレンチ地層断面(4)



Cトレンチ地層断面(5)



Cトレンチ地層断面(6)



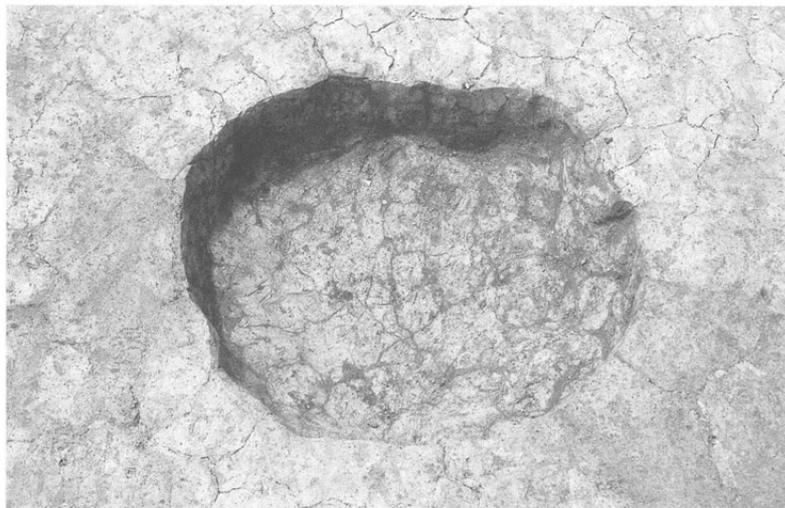
C トレンチ地層断面(7)



C トレンチ地層断面(8)



C トレンチ地層断面(9)



土 坑



柱穴状遺構



作業風景

報告書抄録

ふりがな	あんげんじいせき
書名	安源寺遺跡
編集者	中島 庄一
編集機関	中野市教育委員会
所在地	〒383-0025 長野県中野市三好町1-3-19
遺跡所在地	中野市安源寺
遺跡県番号	6558
遺跡位置	北緯36°44′04″ 東経138°19′95″ 標高348m
調査期間	平成14年5月7日～5月22日
調査面積	約290m ²
調査原因	中野市西部デイサービスセンター（痴ほう型）建設工事に伴う調査
種別	生産遺跡
主な時代	弥生時代
主な遺構	粘土採掘坑
主な遺物	箱清水式土器
調査協力	中野広域シルバー人材センター

安源寺遺跡発掘調査報告書

印刷 平成15年3月20日
発行日 平成15年3月20日
編集・発行 中野市
中野市三好町1-3-19
印刷所 ほおずき書籍株式会社

